



地域史研究者

三善貞司

女傑・広岡浅子②

時代を読み不合理を改善

女子高等教育の先駆に日本女子大学を創設

明治維新後、三井・住友などの金融業者たちは、いち早く政府御用の業者になり、国立銀行の創設に参画、経営も近代化して発展していきます。

ところが彼らと肩を並べていた両替商加島屋の広岡信五郎は坊ちゃん育ち、時代に乗りおくれたところか相変わらず大好きな観世流の謡曲に熱中し、謡の会があると「あとは頼んだで」と妻の浅子に押しつけ、どんな大事な会議でもすっぱかしてとんでいきます。

浅子の実父三井高保はあきれけてしまい、

「あいつはお殿さまや。お前、離縁状たたきつけて帰ってきたはれ」とまで娘に言ってしまう。2歳で信五郎の許嫁にし15歳で嫁がせたとき、「女三界に家無しや。二度と戻ってきたらあきまへんで」と言った父がです。

しかし浅子はくじけませんでした。大丈夫です、私がやりますと答え、父の援助で加島銀行を設立。さらに加島一族の力を結集して当時飛躍的な産業であった紡績と鉱山の分野に進出します。

のちに浅子が明治実業界の最大の女傑とたたえられるのは、この鉱山の経営です。鉱夫たちは気が荒い、すぐに血の流れる暴動が起こる。騒ぎになると浅子は現場に入って鉱夫たちと起臥をともし、労働条件の改善をはかります。若妻とあって好奇の目で眺めたり、侮る者も出てきます。しかし浅子は常に2丁のピストルを携え、ポタポタ水のしたたるまっ暗な坑道にまで入って陣頭指揮をとります。

「凄い女や」とまず現場監督たちが舌を巻いたところで、びっくりするほどの大金を投げだし、待遇を改善しますから、その胆力と行動力には誰もが感服し浅子の命令に従ったから、業績はめきめき上昇しました。

この時代の彼女にはカリスマ的伝説がたくさん残っていますが、本当に女神のような存在でした。とにかく数字に強い。すばやく正確な資料をはじきだし、それで先を読む。決して勘や慣習にはとらわれません。合理的な経営精神で困難を打破し、信五郎はすっかり妻にかぶとをぬぎました。

こう述べる信五郎は凡愚な男に見えるかも知れませんが、けっしてそうではない。温厚な人格者で抱擁力があり、存分に妻が才能を発揮するのを支えました。加島銀行でも尼

崎紡績でも、社長は信五郎です。大事な契約のサインもすべて信五郎です。謡の仲間には多様な実業家があり、彼らのつてで業績を伸ばしたのも、信五郎の腕です。浅子は明治の女だ。どんなことでもかならず夫を前に立て、一步譲って歩いています。

「琴瑟相和す」という言葉があります。夫婦円満で仲睦まじいことのとえですが、信五郎・浅子の夫婦もその見本でした。信五郎は細面ほそおもてで背が高く、和服が似合います。浅子は色白でつぶりと太り、洋装すると西洋の貴婦人のようでした。

明治35年（1902）信五郎が病死すると、浅子はひとり娘のかめ子の婿むこに一柳恵三を迎え、広岡家の養嗣ようしとします。恵三は東京帝国大学法学部の出身で、三井銀行に入社し、経営に敏腕びんわんを振るっていた有望な若者でした。53歳の浅子は安心し、事業のすべてを若夫婦に譲り、いっさい口出ししなくなります。浅子が偉いのはこれからです。

前記したように、浅子は実父三井高保から、学問することをかたく禁じられていました。「女子おなごが孔子や孟子を習つと、屁理屈ばかりが達者になって男に嫌われる」、これが父の言い分です。彼女は企業の先頭に立った経験から、今の日本でもっとも遅れているのは女子教育だ、と痛感していました。

こうして浅子は成瀬仁蔵と知り合います。仁蔵は浅子より9歳年下の安政5年（1858）生まれ。山口県師範学校卒業後、明治11年（1878）大阪に来て梅花女学校を創設、さらに同23年渡米してアメリカの女子教育を視察、日本の後進性に赤面し同27年帰国後梅花女学校校長に復帰し、今度は女子の大学を開設しようと奔走していました。

与謝野晶子と並ぶ明星派の歌人山川登美子（本連載160回参照）をご存じですね。あの登美子は梅花女学校で仁蔵の指導を受け、短歌の才能を認められ、仁蔵の世話で与謝野鉄幹に師事して花開いた女性です。

「女子の才能の芽をむしりつつしてしまうのは、教育制度がゆがんでいるからだ。女子は男に従属するものと、はじめからきめている」と熱っぽく語る仁蔵に、浅子は大いに共鳴します。

東京の深川にある三井別邸に移った浅子は、三井家の援助も受け、企業や資産家に女子高等教育の必要性を説き、資金集めに情熱を注ぎます。こうして東京文京区目白台に開校したのが、日本女子大学です。「自発創生」「信念徹底」「共同奉仕」の綱領は、仁蔵の定めた方針ですが、創設までの浅子の労苦は、仁蔵に劣るものではありません。

日本女子大学の創設は、各界で活躍する女性たちをつみだす先駆けとなりました。

広岡浅子
実業家。嘉永2年（1849）
京都生まれ。女性の人權・地
位向上に尽力。大阪愛国婦
人会の指導者としても活躍。
大正8年（1919）69歳没